

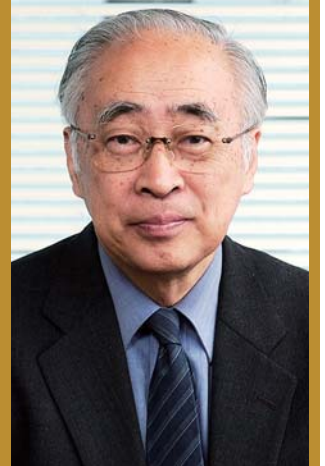
徳川家康公 と駿府

Tokugawa Ieyasu in Sumpu

昭和女子大学 特任教授

平井 聖 氏

HIRAI-Kiyosi



経歴

1929年、東京生まれ。1952年、東京工業大学卒業。現在、昭和女子大学特任教授。東京工業大学名誉教授。金沢美術工芸大学特任教授。上海交通大学顧問教授。専門分野は日本近世建築史、住生活史。駿府城二の丸翼櫓・東大手門復元工事をはじめ、熊本城本丸御殿、五稜郭箱館奉行所、金沢城菱櫓・五十間長屋・橋詰門続櫓、同河北門などの復元を監修。

豊臣色の一掃にむけて策を謀った大御所家康

慶長十六年（1611）四月十二日、黒の覆面をして（寡頭）、後水尾天皇の即位を、後ろで見守っていたのは、ほかならぬ大御所徳川家康でした。

此の即位式は、家康にとって、豊臣色を一掃する大きな目的の、最初で最大の関門だったのです。後陽成天皇の第一皇子良仁親王は、秀吉の意向で皇太子の扱いを受け即位の予定でした。しかし、家康は將軍宣下を受け、すでに二代將軍秀忠まで誕生していた中で、豊臣の意向に依る天皇の誕生は、あり得ないことだったのです。

家康は、豊臣にかかわった人々を、重要なポストから、排除しています。自分の跡継ぎも、例外とはしませんでした。二男秀康を、一時秀吉の猷子となっていたことから

越前福井に封じ、三男秀忠を二代將軍としていきます。後陽成天皇が後継にと望んだ智仁親王も、同じ理由で同意せず、八条宮家を創設しています。その結果が、第三皇子政仁親王の即位だったのです。そのため、無事式が終わるよう、指図しなかったに違いありません。

その後、家康の孫娘和子が、後水尾天皇の女御として入内するのです。

豊臣氏との関係は、大坂夏の陣で決着がつきます。この発端となったのが、方広寺の鐘の銘文ということですが、実はほかに、因縁をつけた人がいたので、それは、家康側近で、京大工頭の大職にいた、中井藤右衛門正清でした。正清は、この時いち早く駿府に下向して、上棟式で掲げられ